

『源氏物語』第四帖「夕顔」の中国語訳について

著者	大野 公賀
著者別名	Kimika ONO
雑誌名	東洋法学
巻	64
号	3
ページ	189-210
発行年	2021-03-25
URL	http://doi.org/10.34428/00012278

《 研究ノート 》

『源氏物語』 第四帖「夕顔」の中国語訳について

大野 公賀

1. はじめに

現在『源氏物語』の中国語訳本として十数種類が存在するが、その多くが中国本土での最初の完訳である豊子愷（1898–1975）の訳本（人民文学出版社1980–83初刊）⁽¹⁾に基づくと言われている。台湾では林文月（1933–）の訳本（中外文学月刊社1974–78初刊）が代表的かつ著名である⁽²⁾。こうした状況から『源氏物語』の中国語訳については、これまでに日本国内外で豊子愷および林文月のそれぞれの訳本研究、あるいは豊子愷と林文月の訳本の比較研究などがなされてきた⁽³⁾。しかし、これらの研究においては原文と豊訳、林訳との比較が主流であった。翻訳に際して豊子愷は金子元臣『定本源氏物語新解』（明治書院1925–30）を底本とし、林文月は吉沢義則『対校 源氏物語新釈』（平凡社1940）を用いている。訳出にあたり、彼らはそれぞれ数種類の現代日本語訳や英訳を参考にしているが、これらの翻訳にはかなりの相違がみられる。したがって、豊子愷と林文月の翻訳の相違を比較するにあたっては、彼らが使用した参考書についても考慮すべきと思われるが、管見の限り参考書と各翻訳の相違に関する研究は極めて少ない⁽⁴⁾。

小論では、豊子愷と林文月がそれぞれ参考にした現代語訳のうち、両者がともに参照した与謝野晶子と谷崎潤一郎の現代語訳に焦点をあて、原文・豊訳・林訳・与謝野訳・谷崎訳を比較し、相違点および豊訳と林訳の特徴が特に明らかな箇所にも焦点をあてて論じたいと思う。尚『源氏物語』の中国語訳研究の多くが第一帖「桐壺」を取り上げていることから、小論では敢えてそれを避け、第四帖「夕顔」を対象とする。第四帖を選択したのは、本帖の女主人公である夕

顔の死去に関連して仏教や霊についての話題も多いため、敬虔な仏教徒として知られる豊子愷の特徴が翻訳に表れるのではないかと考えたためである。また紙幅の関係から、小論では第四帖のうち冒頭の光源氏が病気の乳母を見舞う場面についてのみ論じた。それ以降については今後、順次論じていく。

訳本は豊子愷訳『源氏物語』上巻（人民文学出版社2002）、林文月訳『源氏物語』（一）（洪範書店2012）を使用する。また原文については、本来は豊子愷と林文月がそれぞれ使用した底本を用いるべきであるが、便宜上小論では石田穰二・清水好子校注『源氏物語』第一巻（新潮日本古典集成新装版2016）を使用する。

次に豊子愷と林文月が参照した書籍について述べたい。豊子愷は自身の「訳後記」で、英語・ドイツ語・フランス語の訳本に言及し、日本語の注釈本として藤原定家『源氏物語注釈』、四辻善成『河海抄』、一条兼良『花鳥余情』、三条西公条『細流抄』、中院通勝『岷江入楚』、北村季吟『湖月抄』を挙げ、また現代日本語の訳本として谷崎潤一郎と与謝野晶子の訳本および佐成謙太郎の対訳本を挙げている⁽⁵⁾。豊子愷とともに『源氏物語』の翻訳に従事した豊の四女豊一吟にインタビューをした呉衛峰によると、豊一吟は「豊子愷は翻訳に際して、いつも古文一種と現代語訳三種と、合わせて四種の日本語版『源氏物語』を目の前にならべて仕事を進めていた」と述べ、その現代語訳三種が上述の「谷崎訳、与謝野訳、佐成対訳の三種のとおりであること」を確認したという⁽⁶⁾。現代語訳について豊子愷は「谷崎潤一郎の翻訳が最も正確で詳しい。わかりやすく、原文にも忠実で、作者である紫式部のもともとの風格を失っていない」としながらも、その他の訳本もそれぞれに長所があり、翻訳の参考にしたと述べている⁽⁷⁾。これらの版本について豊子愷は特に記してはいないが、豊の蔵書および翻訳手稿を調査した呉衛峰ならびに徐迎春は、豊子愷が参照したのは全三回の谷崎訳のうち第一回目の『源氏物語』（中央公論社1939-41、山田孝雄校閲）、与謝野訳は河出書房新社の『日本国民文学全集』第3・4巻（1957・58）であると論じている⁽⁸⁾。

一方、林文月は上述の底本（吉沢義則『対校 源氏物語新釈』）の注釈を「最

も頼りに」し、他にも谷崎の第三回目の翻訳『新々訳源氏物語』（中央公論社1969）や与謝野晶子訳（角川文庫1972）、円地文子訳（新潮社1972）、アーサー・ウェイリー（Arthur Waley）およびエドワード・G・サイデンステッカー（Edward G. Seidensticker）の英訳本 *The Tale of Genji* を参考にしたと述べている⁽⁹⁾。林文月は1974-78年の初刊以降も修訂を続け、1982年・87年（いずれも中外文学月刊社）、また1997年（洪範書店）に修訂版を刊行している。当初は前述のように吉沢義則『対校 源氏物語新釈』を底本かつ注釈本としていたが、修訂過程において底本を阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』全6巻（『日本古典文学全集』第12-17巻、小学館1970-76）に変更している。尚、豊子愷訳『源氏物語』については、1987年に香港の友人経由で入手したと述べている⁽¹⁰⁾。

以上から、谷崎本・与謝野本についても本来ならば、それぞれが参照した版本を使用すべきではあるが、便宜上、谷崎については第三回目の翻訳『新々訳源氏物語』第1巻（中央公論社1964）を、また与謝野については『源氏物語』上巻（日本文学全集1、河出書房新社1962）を使用する。

2. 豊子愷と林文月の背景および翻訳について

次に、豊子愷と林文月について簡単に述べておきたい。豊子愷は1920年代後半以降、上海を中心に多彩な分野で活躍した中国の代表的知識人であり、近代芸術家の一人である。浙江省桐郷石門に生まれ、浙江省立第一師範学校を卒業後は主として上海で芸術教育に従事した。1921年に約十ヶ月日本に留学し、美術や音楽、日本語、英語などを学んでいる。帰国後は『縁縁堂随筆』等の随筆や「子愷漫画」と称されるイラストの創作、芸術教育、雑誌の編集など多様な方面で才能を発揮した。戦時中は中国各地で疎開生活を余儀なくされたが、戦後は上海に戻り、主として日本語やロシア語、英語等の翻訳に従事した。また著名な文化人という事で、戦後は本人の意思とは裏腹に、政治的に重要な役割を担わされる事も多く、文革時には厳しい批判にさらされた。

豊子愷は初め、師範学校時代に恩師の李叔同と夏丐尊に日本語の基礎を学

び、その後、上述のように日本に十ヶ月程滞在した。豊子愷が末子の豊新枚に送った書簡は時折、日本語で書かれているが、ほとんど間違いのない立派な文章である。しかしながら、『源氏物語』を翻訳するのに十分な日本語能力と日本の古典文化に関する知識を有していたかという点については疑問が残る。それにも関わらず、豊子愷が中国政府による「世界文学の中国語翻訳」という国家事業の一助を担うべく、『源氏物語』全訳の担当者選ばれたのは、豊よりもはるかに日本語が堪能で日本文化にも通じていた周作人や銭稻孫には依頼できない諸事情があったためである⁽¹¹⁾。現存する豊子愷の翻訳手稿には緑色と赤色のペンで修正が入っているが、緑色は前述の豊一吟による修正と付注であり、赤色は編集者（不明）による加筆である⁽¹²⁾。豊子愷の翻訳には日本文学研究者の劉振瀛および周作人、銭稻孫らの意見や修正が反映されているが、それがどの段階でなされたのか、また上述の赤色の修正に相当するのかは現段階では不詳である。

豊子愷が小学校教員の養成を目的とした師範学校で美術や音楽を学ぶ傍ら、ほぼ独学に近い形で日本語を学んだのに対し、林文月は日本占領下の上海で生まれ、小学校六年生の時（1946年）に台湾に移住するまでは日本語で教育を受けた。林は台湾大学で中国文学の修士号を取得し、同大で教鞭に立ち、1969年には一年間京都大学で研究に従事している。

豊子愷と林文月のこうした背景を比較すると、林文月の翻訳の方が豊子愷よりも正確で高雅であるような印象を与えがちである。例えば、周作人は香港在住の友人鮑耀明に宛てた書簡で、豊の翻訳は原文よりもむしろ与謝野や谷崎の現代語訳ばかりを参照しているかの如く揶揄し、豊は「その任に堪えない」と述べ、また豊の訳は「寄席の講談のようで、源氏物語とは如何なる書物なのか、彼にはわかっていないようだ」と酷評している⁽¹³⁾。しかし、日本文学研究者で自らも『源氏物語』の翻訳者である姚継中は、豊子愷が翻訳に際して利用した底本は「実は与謝野晶子や谷崎潤一郎の現代口語訳だった」としながらも、次のように述べている。

豊子愷の原作への理解がそれほど緻密ではなかったと言っても、原作の

文脈がスムーズに把握できさえすれば、優れた中国語の表現能力によって、原作の意味を流暢かつ優美に表現することができたのである。なお、豊子愷訳本に対する現代の読者の満足度はかなり高いが、豊子愷と同時代の銭稻孫、周作人などの日本文学翻訳家は、却って批判的な態度を持っていた。

姚継中ではまた、中国では古代小説すなわち明清の章回小説とする「詩学的形式が經典化されたため、中国における『源氏物語』の翻訳は、その固定化された『古代小説』の理念と枠から逃れることができなかった」と述べ、それに対して林文月の翻訳は「例外」のように見えると論じた上で、しかしそれでも尚、林訳もまた「当時の社会の文学的嗜好に影響を受けている」として、次のように述べている。

林文月が翻訳した『源氏物語』は、当時大衆読物の外国小説として『中外文学』に掲載され、台湾の読者層に大きな反響を与えた。しかし、学術的な点から林文月の訳した『源氏物語』を見ると、この訳本の叙事文の部分が口語化、女性化しすぎており、然も中国特有の文化要素もたくさん使用されている。中国語読者に迎合したために、一部の日本の固有文化が切り捨てられることになったのは評価できないだろう⁽¹⁴⁾。

実際に両者の翻訳を詳細に比較すると、林訳では学術性にこだわる余りか一般読者には難しい表現が多用され、読み物としての味わいが失われている箇所もあれば、豊訳の方が原文により忠実な箇所もあり、また豊訳には周作人の言うような「講談」的な箇所もあれば、非常に美しい表現がなされている箇所もあり、両者の相違点や特徴について一概に判断するのは難しい。そこで、小論では細かい点も含めて、第四帖「夕顔」冒頭の光源氏が病気の乳母を見舞う場面を詳細に比較していきたい。

3. 豊子愷訳と林文月訳の相違例

以下、例を提示するにあたり、豊子愷・林文月・与謝野晶子・谷崎潤一郎の各翻訳については問題の箇所のみ記載するが、原文と現代語訳については場面説明が必要な場合はその前後も記載する。豊訳と林訳の【 】内の数字はそれ

ぞれ頁数と行数を表す。豊訳と林訳の数字は原注であるが、これについては中国語原文は表記せず、日本語訳のみ記載する。また谷崎訳の片仮名は原注である。現代語訳および豊訳と林訳の日本語訳は大野による。光源氏については、以下源氏と略記する。また、ルビはいずれも省略する。

(1)

【原文】…大貳の乳母のいたくわづらひて 尼になりにける、とぶらはむとて、五条なる家尋ねておはしたり。

【現代語訳】…大貳の妻であった乳母が重い病を患い尼になっていた。源氏はその方を見舞おうとして、五条にある家を探ねていらっしやった。

【豊61-2】…想起住在五条の大貳乳母③曾生了一场大病，为了祈愿复健，削发为尼…。

訳：…源氏は五条に住んでいた大貳の乳母が③かつて大病を患い、快復祈願のために尼になった事を思い出し…。

豊注③：対外関係のために筑前（原注：九州の一国）に設置した行政機構を太宰府という。その長官を帥と称し、次官を大貳、少貳という。ここでは乳母の夫の官職名である。

【林62-2】…想起因病而寄身為尼的大貳乳母②…。

訳：…源氏は病のためにその身を寄せて尼になった大貳の乳母のことを思い出し②…。

林注②：源氏の乳母。病が重いため一時的に出家して尼になった。

【与謝野訳51-上2】…だいぶ重い病気をし尼になった大貳の乳母をたずねようとして…。

【谷崎95-1】…大貳の乳母が重い病気で①尼になったのを…。

谷崎注①：重病の場合に出家して佛の加護を求めるのである

【相違点】源氏の乳母が出家したのは谷崎注にあるように、当時は出家をする、その功德で延命が叶うとされていたためであるが、与謝野訳ではこの点については何も説明されていない。豊訳では「为了祈愿复健（为了祈願復健：快

復祈願のために)」という言葉が補われているために、乳母の病気と出家の因果関係が明白である。林訳では注に「病が重いため一時的に出家して」とあるが、その出家が快復祈願のためとは理解しにくい。また豊訳では、「大弐の乳母」の「大弐」について詳細に述べられているが、林訳では特に説明はされていない。

（2）

【原文】 御車入るべき門は鎖したりければ…。

【現代語訳】 賓客のお車が入るべき正門は閉じられていたので…。

【豊61-4】 …看见可以通车的大门关着…

訳：…お車をお通しすべき正門が閉まっております…。

【林62-2】 大門關着…。

訳：正門が閉まっております…。

【与謝野訳51-上3】 乗ったままで車を入れる大門をしめてあったので…。

【谷崎95-5】 御車を入れるべき門がとざしてありましたので…。

【相違点】 この「御車入るべき門」について、豊子愷、林文月ともに「大門（正門）」と訳しているが、これは賓客が車に乗ったまま出入りするのための表門で、通常は閉ざされている。与謝野訳で「乗ったままで車を入れる大門」、谷崎訳で「御車を入れるべき門」とあるのはこのためである。これも（1）と同様に細かい事ではあるが、平安時代の日本の習慣や習俗に不慣れな読者には、豊訳のように補足説明を加えた方が理解しやすいと思われる。

（3）

【原文】 …ものはかなき住まひを、あはれに、何処かさして、と、思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

【現代語訳】 …簡素な住まいを、しみじみと「いずこを指して（これこそが我が終生の宿と言えようか、いずこも終生の宿ではないのだ）」とお思いになると、立派な御殿も（卑しい住まいも所詮は）同じ事なのである。

大野注：原文の「いづこかさして」の引き歌は『古今和歌集（以下、古今集）』卷十八雑下「世の中はいづれかさしてわがならむ 行きとまるをぞ宿と定むる」（よみ人しらず）。

【豊62-1】他觉得很可怜，想起古人“人生到处即为家”①之句。又想：玉楼金屋，还不是一样的么？

訳：源氏は哀れに思い、古人の「この世のいづこも我が終生の宿には非ず」①という句が思い起こされたが、その一方でまた「立派な御殿も結局は同じ事ではないか」とも思われるのであった。

豊注①：この句の引き歌は『古今集』の「陋屋も立派な御殿も同じ事 この世のいづこも我が終生の宿に非ず」という歌。

大野注：豊訳の「人生到处即为家（人生到处即为家）」は中国語の成語「四海為家」と同じく「この世のいづこもすべて我が家である」という意味と、それとは逆に「人の魂にとって現世はつかの間の仮住まいに過ぎず、いづこも終生の宿ではない」という宗教的な意味の両方にとる事が出来る。ここで豊子愷が用いたのは後者である。また、この「人生到处即为家」という表現は宋の蘇頌（1020-1101）『契丹帳』の一節「行營到处即为家」に由来すると考えられる。

【林62-2】反正是「人生如寄」③，就算是金殿玉樓又如何呢？

訳：結局のところ「人はこの世につかの間、身を寄せているようなもの」③で、立派な御殿だからと言ってそれが一体何であろうか。

林注③：『古今集 雑下』よみ人しらずの和歌。「人生既如寄 華屋茅舎均非吾人 永久住所地（人はこの世につかの間、身を寄せているようなもの 豪華な邸宅も卑しい家もいずれも我が終生の住処ではない）」

大野注：林訳の「人生如寄」は三國魏の曹丕『善哉行』の一節「人生如寄 多憂何爲（人はこの世につかの間、身を寄せているようなもの 多くを憂いたところで何になろうか）」に由来すると思われる。

【与謝野訳51-下4】哀れに思ったが、ただ仮の世の相であるから宮も藁屋も同じことという歌が思われて、われわれの住居だっていっしょだとも思えた。

【谷崎96-5】…はかない住居なのですけれども、④「いづこかさして」とお悟

りになってみれば、玉のうてなも同じことです。

谷崎注④：世の中はいずれかさしてわがならん行きとまるをぞ宿と定むる〔古今集〕

【相違点】 上述のように、豊沢では蘇頌『契丹帳』の一節「行営到处即為家」を想起させる「人生到处即為家」という表現を、また林沢では三國魏の曹丕『善哉行』の一節「人生如寄 多憂何爲」を用いる事で、源氏の胸の奥に潜む無常感を表現している。ただ、豊沢ではその前に「源氏は哀れに思い」との一節があるため、源氏の華やかな日常や、当時交際していた六条御息所の風雅な暮らしとはかけ離れた夕顔の侘しい生活が想起される。

尚、原文の「あはれに」は「『いずこかさして』と思ほしなせば」と続く事から、これは源氏がしみじみと世の無常に感じ入っている事を表しているのであって、夕顔の暮らしを憐れんでいるのではない。そのため、豊沢や与謝野沢のように「哀れに思」うというのは誤沢と言えるかもしれない。しかし、源氏が後に夕顔に如何とも離れがたく思うに至る一因として、夕顔への憐憫の情も考えられる事から、豊沢や与謝野沢は誤沢ではなく、むしろ意沢と解釈する事も可能であろう。一方、林沢や谷崎沢ではこの「あはれに」という言葉が省略されており、平素は華やかな世界に身を置きながらも、心の奥底では人生に対する漠然とした不安を抱いていた源氏の心のありようが十分に表現しきれていないように思われる。

（4）

【原文】「遠方人にももの申す」と、ひとりごちたまふを…。

【現代語沢】「遠方の人にお尋ねする」と独り言をおっしゃると…。

大野注：下記谷崎注にもあるように、この源氏の独り言は『古今集』巻十九旋頭歌「うちわたす 遠方人にももの申すわれ そのそこに 白く咲けるは 何の花ぞも」（よみ人しらず）を引用したもの。「旋頭歌」とは和歌の様式の一つで、五・七・七・五・七・七の六句を定型とする。五・七・七の三句19音からなる片歌の唱和から起こったと言われる。

【豊62-3】源氏公子独自吟道：“花不知名分外娇！”

訳：源氏の君は一人「名も知れぬ花がことのほか美しい！」と歌を吟じられた。

大野注：豊訳の「花不知名分外娇（花不知名分外嬌）」は宋の辛棄疾（1140-1207）の『鷓鴣天 東陽道中』の一節「山無重数周遭碧 花不知名分外嬌」に由来する。この詞は辛棄疾が大理少卿の官職にあった頃、職務で南宋の都臨安（現浙江省杭州）から東陽（現浙江省東陽県）へと向かう途上で詠んだものである。都での高雅な生活とは程遠い劣悪な環境の中、目的地へとひたすら急ぐ途中ふと目にした青山や路傍の名も知れぬ花の美しさに心を動かされる様を描いている。

【林62-9】「請問遠方人……」④、他不自覺地吟詠起那首歌詞來。

訳：「遠方人にお尋ねいたします……」と④、源氏は思わずあの歌をお詠みあそばすのであった。

林注④：「古今集」雑体旋頭歌の一節。歌全体の意味は「遠くのお方にお尋ねいたします この白い花は何と言うのでしょうか」。（大野注：林注の「雑体」は『古今集』巻十九に見える部立の一つで長歌、旋頭歌、俳諧歌などを含む。前述の「雑下」は「雑歌の下」で「雑体」とは異なる。）

【与謝野訳51-下9】そこに白く咲いているのは何の花かという歌を口ずさんでいると…。

【谷崎96-5】⑤「遠方人に物申す」と、独りごとをおっしゃいますと…。

谷崎注⑤：打ち渡す遠方人に物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも〔古今集旋頭歌〕

【相違点】原文の「遠方人に物申す」は、前述のように『古今集』の「打ち渡す…」を想起させるためであり、その真意はこの引き歌の後半「そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」にある。その意味において、林訳は原文に忠実であり、注も含めて一般の読者にもわかりやすい。

一方、豊訳では辛棄疾『鷓鴣天 東陽道中』の一節「山無重数周遭碧 花不知名分外嬌」が用いられており、源氏が周囲の乾いた景色の中で密やかに咲き誇

る花の美しさに心を留めた点が強調されている。前述のように『鷓鴣天 東陽道中』は、都での風雅な暮らしとは真逆の砂埃にまみれた長い道のりを進む中、ふと目にした青山や名もなき花のひっそりとした美しさに心を動かされる様を詠んでいる。豊子愷がこの場面で敢えてこの詞を用いたのは、夕顔の住まいの周辺の猥雑さと、それに似つかわしくない花の静かな美しさを対比させるためであろう。この段階で源氏はまだ夕顔の存在を知らず、ただ周囲のむさくるしさと対照的な可憐な花に目を留めたに過ぎない。しかし、この可憐な花が本帖の女主人公夕顔を象徴する事を考えると、豊子愷は『鷓鴣天 東陽道中』を引用する事で、正妻葵の上や恋人六条御息所には満たされる事のない源氏の乾いた心、そしてこれらの高貴な女性との交際に疲れ倦んだ源氏が、彼らとは対極的な立場にある夕顔にのめりこんでいく姿を言わば伏線的に描いたとも言えよう。

（5）

【原文】…御隨身つゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき 垣根になむ咲きはべりける」と申す。

【現代語訳】…御隨身が跪いて「あの白く咲いている花は夕顔と申します。花の名は人のようでございますが、（とても人の住まうような場所ではない）こうした賤しい家々の垣根に咲くのでございます」と申し上げる。

大野注：上述の（4）の源氏の独り言に対して、御隨身がその引き歌を承知して、花の名を答える場面。「人めきて」の「人めく」は「人のように見える」の意味であるが、接続助詞「て」は逆説を表す事から、この箇所は夕顔という花の名が人名のようであるという事を言い、また「人」と「あやしき垣根」を対比させて、花の名は「人」のようでありながら、とても人の住む場所とは思えない「賤しい垣根」に咲く花なのだと述べている。尚、隨身とは平安時代に入皇や摂関以下中将等、貴人の外出に際して、護衛と威儀を兼ねて勅命により付き従った近衛府の官人で、ここでの「御」は隨身に対してではなく、貴人である源氏への敬語である。

【豊62-5】…随从稟告：“这里开着的白花，名叫夕顔②。这花的名字象人的名字。这种花都是开在这些肮脏的墙根的。”

訳：…隨身は「こちらに咲いております白い花は、その名を夕顔と申します②。この花の名は人の名のごとでございます。このような花はいずれもこうした賤しい垣根に咲くのでございます」と申し上げる。

豊訳注②：瓢花あるいは葫芦花、日本では夕顔と称する。

大野注：豊子愷は全体を通じて、現代中国語であれば正しくは「像」を使うべき所に「像」の当て字「象」を用いている。これは豊子愷の誤用ではなく、当時まだ「像」と「像」の使い分けが現在ほど明確に規定されていなかったためと考えられる。また平安時代の夕顔とは、豊訳注②にあるようにウリ科の花であり、現在我々が一般に思うヒルガオ科の花ではない。

【林62-10】…有個侍従立刻跪下來稟告：「那些白色的花朵，名叫夕顔⑤。花名就像人名，通常是開在這種卑微人家的牆垣上的。」

訳：…侍従がすぐに跪き「あの白い花は、その名を夕顔⑤と申します。花の名はまさに人の名のごとで、こうした賤しき人家の垣根によく咲くものでございます」と申し上げる。

林注⑤：夕刻に咲き、朝方に萎れるため夕顔と言う。

【与謝野訳51-下10】…中将の源氏につけられた近衛の隨身が車の前に膝をかかめて言った。「あの白い花を夕顔と申します。人間のような名でございます、こうした卑しい家の垣根に咲くものでございます」

【谷崎96-5】…御隨身が跪いて、「あの白く咲いておりますのを夕顔と申します。花の名は人並みでございますが、こういう怪しげな垣根に咲くものでございます」と申します。

【相違点】原文の「御隨身」を豊子愷は「随从（随従）」、林文月は「侍従（侍従）」と訳している。「随从」にも立場や身分のある人の随行者という意味があるが、源氏の随行者を表すには皇帝や高位の役人の随行者に用いられる「侍従」の方がより適切であろう。また、豊訳では原文の「ついゐて（つい居る：膝をついて座る）」が訳出されていないが、源氏と隨身との身分の隔たりを

はっきりと示すためには、ここは林訳のように訳出した方がよいと思われる。尚、これ以前の情景を踏まえての意識にはなるが、与謝野訳のように「車の前に膝をかがめて」とすると、この点は更に明瞭になる。

また豊訳、林訳および与謝野訳では、逆説を表す接続助詞「て」が訳出されておらず、花の名が人名のようだという前半部分と、夕顔の花は通常、貴族の邸宅ではなく庶民の住む貧しい家々に咲くという後半部分の関係が明瞭ではない。この関連性の処置に困ったためか、豊訳ではこの前半部分と後半部分を二つの文に分けているが、林訳および与謝野訳では順接的に訳している。そのため、夕顔の花が人間のような名を持ちながら、人並みの暮らしとは程遠い猥雑な町の賤しき垣根にばかり咲くことを不釣り合いだと思ふ随身の気持ちが反映されていない。細かい事ではあるが、この場面は夕顔の花に象徴される女性夕顔が実は貴族の邸宅で暮らしてもおかしくはない身の上でありながら、このような陋屋に人知れず身を潜めている事を示唆しており、重要な意味をもつと考えられる。

（6）

【原文】 惟光が兄の阿闍梨、婿の三河の守、むすめなど…。

【現代語訳】 惟光の兄の阿闍梨、娘婿の三河守、娘など…。

【豊62-18】 惟光的哥哥阿闍梨③、妹夫三河守和妹妹都…。

訳：惟光の兄の阿闍梨③、妹の夫である三河守、妹など皆…。

豊訳注③：僧官の最高級を僧正（そのうち大僧正は最高位で、僧正がこれに次ぎ、さらに権僧正が次ぐ）と称し、その下は僧都（大僧都、権大僧都、少僧都、権少僧都の四階級区分）となり、更にその下が律師（正と権の二階級区分）である。阿闍梨は律師の下になる。

【林63-5】 惟光的長兄阿闍梨、乳母的女婿三河守以及女兒等…。

訳：惟光の長兄の阿闍梨、乳母の娘婿の三河守や娘など…。

【与謝野訳52-上11】 惟光の兄の阿闍梨、乳母の婿の三河守、娘など…。

【谷崎97-1】 惟光の兄の阿闍梨、婿の三河守、娘など…。

【相違点】 豊子愷は（１）で乳母の夫の官職である大貳について説明しているが、ここでもその息子で、源氏の乳母子で腹心の家臣惟光の兄である僧官阿闍梨についても詳細に述べている。阿闍梨という言葉は現代中国語では用いられないため、一般の読者には豊訳のように説明がある方が親切であろう。

（７）

【原文】 九品の上

【現代語訳】 九品浄土の最上位

【豊63-5】 九品浄土

訳：九品浄土

【林63-11】 九品浄土的最上世界⑥

訳：九品浄土の最上世界

林訳注⑥：極楽浄土には上、中、下の三品があり、各品がまたそれぞれ上、中、下の三生に分れているため、最上世界とは上品上生を指す。

【与謝野訳52-下3】 九品蓮台の最上位

【谷崎96-5】 九品浄土の㊤一番上の世界

谷崎注㊤：極楽浄土には上中下の三品があり、その三品のおのおのがさらに、上中下の三生に分れている。一番上の世界というのは上品上生のこと

【相違点】 現代中国語において「九品」は古代の官位と誤解される可能性があるが、浄土は中国語においても同様であるため、「九品浄土」で意味は通じると思われる。ただ豊訳では原文の「上」が省略されている。ここは源氏が乳母に対して、長生きをして自分が出世していく様を見届ければ、この世への執着も無くなり極楽浄土の最上位に生まれ変われる事も出来ると言う場面なので、やはり「最上位」を表す「上」は訳出すべきであろう。林訳では谷崎注とまったく同様な内容の注が添えられている事から、少なくともこの箇所については谷崎訳を参照したのではないと思われる。

（8）

【原文】…げによに思へば、おしなべたらぬ人の 御宿世ぞかしと、尼君をもどかしと見つる子ども、皆うちしほたれけり。

【現代語訳】…なるほど、ほんとうに思えば、（このような素晴らしい方をお育てできた母は）ありきたりの人とは異なる御宿運をもっておられたのだと、（先程までは）尼君を非難がましく見ていた子供らも皆、しみじみとした思いを抱くのであった。

大野注：これは、源氏の見舞いに感動した乳母がいつまでも涙ながらに源氏に語りかけるのを見て、子供らは当初、出家して捨てた筈のこの世に未練があるように見苦しいと思い、母の事を恥ずかしく思っていたのだが、源氏の尋常ならぬ美しさを目の当たりにし、また源氏の母に対する誠実で優しい態度に触れ、このような優れた御方の乳母となり得たのは、母が特別に恵まれた宿命の下に生まれたのだと感じ入る場面である。

【豊63-19】乳母の子女們先前抱怨母亲啼啼哭哭，现在也都感动得掉下眼泪来，想道：“怪不得，做这个人的乳母，的确与众不同，真是前世修来的啊！”

訳：乳母の子供らは先程まで母親がいつまでもめそめととしている事を恨みがましく思っていたが、今では皆が心動かされて涙をこぼし「なるほど、この御方の乳母になるとは、確かにひとかたならぬ事で、母上はまさに前世で徳を積んで来られたのだ！」と思うのであった。

【林64-2】先一刻還在那兒責怪老母哭喪着臉不好看的孩子們，這時才覺察到自己的母親有幸而做了這樣了不起的人物的乳母，實在不是尋常的運氣，難怪她要感動得流淚呢。

訳：先刻まではまだ老母がそこで泣き続けているのを見苦しい事と恨みに思っていた子供たちも、この時になってようやく自分たちの母親は幸運にもこのような素晴らしい御方の乳母になったが、それは実に並々ならぬ運であり、母が感動して涙を流すのも道理であると悟ったのである。

【与謝野訳53-上5】…この方の乳母であり得たわが母も善い前生の縁を持った人に違いないという気がして、先刻から批難がましくしていた兄弟たちも、し

んみりとした同情を母へ持つようになった。

【谷崎98-8】…なるほど、思えば、めったにない仕合せな人であったのだと、
尼君の泣いたのを見苦しく思った子供たちも、皆涙に濡れるのでした。

【相違点】原文中の「おしなべたらぬ人の 御宿世ぞかし」について、豊子愷は「的确与众不同，真是前世修来的啊（的确与衆不同、真是前世修来的啊：確かにひとかたならぬ事で、母上はまさに前世で徳を積んで来られたのだ）」と訳している。これは与謝野訳の「よい前生の縁を持った人」に近い。また、林文月は「有幸（幸運にも）」と訳し、谷崎は「めったにない仕合せな人」と訳している。これらはいずれも原文の「おしなべたらぬ人」というニュアンスはよく出ているが、「御宿世」の意味が出ていない。「宿世」とは単なる幸運ではなく前世からの因縁や宿命を指しており、当時の貴族にとって重要な概念のため、ここでは豊訳の方が適切と言えよう。

（9）

【原文】「揚名の介なる人の家になむはべりける。…」

【現代語訳】「揚名介である人の家だそうでした。…」

大野注：「揚名介」は実務や俸給を伴わない、名前だけの地方官次官である。
一種の名誉職で、裕福な者が一定の金額を払い、その名をもらった。

【豊64-11】“这房子的主人是揚名介①。…”

訳：「この家の主人は揚名介①でございます。…」

豊訳注①：揚名介は官名だけがあって、職務も俸禄もない一種の官職名である。この人は夕顔（原注：すなわち35頁で頭中將が話題にした常夏）の乳母の娘婿である。

【林62-2】「據説房子是揚名介所有。…」

訳：家は揚名介が所有しているとの事です。…」

【与謝野訳53-下6】「地方庁の介の名だけをいただいている人の家でございました。…」

【谷崎99-8】「揚名介①の人の家だということでございます。…」

谷崎注①：介は諸国の次官のこと、揚名は有名無実の義で、官名だけあって俸禄や職務のない介をいう

【相違点】原文では推量の助動詞「なむ」が使われているが、豊訳や与謝野訳ではそれが訳出されていない。また揚名介という官職に関する豊訳注は谷崎訳注に非常に近いので、ここは谷崎訳注を参照した可能性が高い。与謝野訳では一般にあまり知られていない揚名介という職名の代わりに、文中で具体的に説明している。また、豊子愷は訳注でこの家の持ち主であり、揚名介をしているという人と夕顔の関係、さらに夕顔と頭中将との関係についても述べている。『源氏物語』は登場人物が多く、その関係も複雑であるため、豊子愷のように適宜説明を加える事は、一般の読者が理解を深める一助となった事であろう。

(10)

【原文】…したり顔にもものなれて言へるかな、と、めざましかるべき際にやあらむと、おぼせど、さして聞こえかかれる心の、憎からず過ぐしがたきぞ、例の、このかたには重からぬ御心なめるかし。

【現代語訳】源氏は「…得意顔になれなれしく歌を詠みかけてきたものだ」と思い、また「身の程知らずの低い身分の者ではあろうが」とお思いになるが、自分を源氏と思って名指しで歌を詠みかけてきた気持ちを、憎からず見過ごしがたきと思われた。というのも、この御方は例によって恋愛に関する方面では軽率な御性分の故であろう。

大野注：前半は、源氏に差し出された、夕顔の花を載せた扇に書かれた歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花（当て推量で思うのですが、もしや貴方様は源氏の君ではないでしょうか 白露の光を添えた夕顔の花）」に対する源氏の感想で、後半「例の、この方には…なめるかし（この御方は例によって恋愛に関する方面では軽率な御性分の故であろう）」は源氏に対する草紙地である。

【豊64-14】“…这首诗大约是熟练的得意之笔吧。”又想：“这些人身份都不见得高贵；但特地赋诗相赠，此心却很可爱，我倒不能就此丢开了。”他对这些事本

来は很容易動心的。

訳：源氏は「…この詩は恐らく詠みなれた者の会心の作なのであろう」と思い、また「ここにいる者たちはいずれも高貴な身分ではあるまい。だが、わざわざ詩を詠んで送ってくる、その心はなんとも可愛らしく、ここで私が止めてしまう訳にもいくまい」とも思うのであった。こうした恋愛事に対して源氏は元々、心を動かされやすい質なのである。

【林64-16】 寫得這樣坦率，這種女人見了面多半會令人失望的吧；不過，這麼一首針對着自己歌詠的詩，那作者的心意，卻又教他不忍疏忽。加上他本是個多情種的關係吧，…

訳：このようにざっくばらんに書いてくるとは、このような女はたいい会ってみたら、がっかりさせられるのだ。しかし、このように自分に向けて詠んだ詩や、それを詠んだ人の気持ちを考えると、それをおろそかにするのは忍び難いようにも源氏は思うのであった。くわえて源氏という方は元々、移り気な性質のためであろう。

【与謝野訳53-下12】 …（源氏は）いい気になって、物慣れた戯れをしかけたものだと思い、下の品であろうが、自分を光源氏と見て詠んだ歌をよこされたのに対して、何か言わねばならぬという気がした。というのは女性にはほどされやすい性格だからである。

【谷崎99-11】 …したり顔に馴れ馴れしく書いたことよと、どうせお座のさめるような身分の者であろうとはお思いになるのですけれども、こちらを目ざして詠みかけて来た心根を、どうも捨ておきがたく憎からずお思いになりますのも、例によってこの方には軽々しい御性分のせいなのでしょう。

【相違点】 源氏が受け取った扇に書かれた歌のよみ人については夕顔説と、夕顔に仕える女房説の二つがある。豊子愷は「这些人（這些人：これらの人々）」という複数を表す言葉を用いる事で、夕顔本人の可能性も残しつつ、よみ人を不特定化している。また原文の「めざましかるべき際にやあらむ」は、源氏が夕顔やその女房らの事を自らに比べてはるかに身分の低い人間であろうに、こともあろうに相手を源氏と踏んだ上で、大胆にも歌を詠みかけて来た事に対し

て、身分の違いをわきまえぬ行為だと思う箇所である。このような行為は通常はあり得ず、源氏がそれに驚きと違和感を覚えているのは、その直前の「したり顔にももの馴れて（得意顔になれなれしく）」という表現からも明らかである。この箇所について、豊子愷は「したり顔」「ものなれて」を読み間違えたのか、「詠みなれた会心の作」としている。また、それに続いて「いずれも高貴な身分ではあるまい」と訳しており、源氏の抱いた違和感は反映されていない。一方、林訳では「このようにぎっくばらんに書いてくるとは、このような女はたいい会ってみたら、がっかりさせられるのだ」とあり、女の大胆な行為に源氏が驚き、そのような事は相手がきちんとした女性ならばあり得ない事だと思ふ気持ちが訳出されている。

4. おわりに

以上、『源氏物語』の中国語訳について、第四帖「夕顔」の冒頭、源氏が大式の乳母を見舞う場面から十例を挙げて、豊子愷訳と林文月訳の比較を行なった。

上述の十例は、その特徴から大まかに以下のように分類される。

- (a) 日本固有の事物や風習に関する箇所：(1) (2) (6) (7) (8) (9)
- (b) 和歌の翻訳に関する箇所：(3) (4)
- (c) 仏教に関する箇所：(7) (8)
- (d) 原文読解あるいは文法理解の相違が著しい箇所：(5) (10)

このうち、豊子愷と林文月の相違が最も著しいのは (b) であろう。林訳では意識 (3) と直訳 (4) の双方の手法が用いられているのに対し、豊子愷は和歌の箇所を内容にふさわしい漢詩に置き換えている。こうする事で、漢詩に慣れ親しんだ中国の読者の理解を深めたいとの考えによると思われる。しかし、その一方でその漢詩が想起させる内容によって原文の雰囲気異なってくる可能性も否めない。

小論では紙幅の関係から、第四帖「夕顔」の冒頭場面についてのみ論じた。上記 (b) の和歌の処理も含めて、より多くの具体例を見る必要がある事か

ら、豊子愷と林文月の中国語訳に関する結論は今後の課題とし、これ以降の場面について今後、順次論じていきたいと思う。

尚、小論のテーマは2019年度の東洋大学大学院の授業「中国文学演習」で扱ったものである。同授業に参加した院生の皆さん（東洋大学大学院文学研究科の楊若林さん・劉雨佳さん・鄭丹さん、輔仁大学文学部大学院からの留学生の蔡佩吟さん）には豊訳と林訳の比較を通じて、様々な相違例を挙げてもらい、また中国語母語者という立場から多くの貴重な意見を頂戴した。ここに深く感謝の意を表する。

注

- （1） 豊子愷は『源氏物語』を1961-65年に訳了したが、文化大革命（1966-76）の影響で出版は豊の没後となった。
- （2） 豊子愷の訳本以降、中国本土および香港では溫祖蔭訳本（香港学林書店1990）、殷志俊訳本（遠方出版社1996・雲南人民出版社2002）、黃峰華訳本（内蒙古児童少年出版社2001）、夏元清訳本（吉林攝影出版社2002）、梁春訳本（雲南人民出版社2002）、喬紅偉訳本（北方文艺出版社2002）、姚繼中訳本（重慶出版社2005・深圳報業集團出版社2006・鳳凰出版傳媒集團および江蘇人民出版社2010等）、鄭民欽訳本（北京燕山出版社2006）、康景成訳（陝西師範大学出版社2008）、唐蓓訳本（天津人民出版社2008）、王烜訳本（中国華僑出版社2010）、葉渭渠・唐月梅訳本（作家出版社2013）、李宏偉（作家出版社2014）、潘蕊（吉林大学出版社、2016）、津文（團結出版社2016）、荷月影（天津人民出版社2016）等が出版されている。

また完訳以外では、豊子愷の訳本以前に錢稻孫による部分訳がある。錢稻孫は最初の一五帖を訳出したが、現存するのは雑誌『譯文』（北京・人民文学出版社、1957年8月号）に掲載された「桐壺」のみである。それ以外は文化大革命中に散逸したと言われている。

台湾の林文月は当初、月刊学術誌『中外文学』第1巻第11期（1973年4月）に「桐壺」を試的に発表し、それが好評であったため『源氏物語』の全訳に取り組んだという。台湾における林文月以外の翻訳としては左秀靈による訳本（台北名山出版社1973）

が挙げられる。

呉衛峰「『源氏物語』の中国語訳 豊子愷訳の成立を中心に」日本比較文学会編『越境する言の葉』彩流社、2011年、173-175頁。林文月「源氏物語」『写我的書』広西師範大学出版社、2015年、64頁。https://genjiito.org/genji_infomation/genji_history/ 2020年12月5日参照。

- (3) 豊子愷および林文月の翻訳研究の概況については、以下に詳しい。

朱秋而著・庄婕淳訳「中訳本『源氏物語』試論—光源氏の風流な人物造型を例として—」『海外平安文学 研究 ジャーナル 5.0』（オンラインジャーナル ISSN 2188-8035、2016年9月、13-15頁）。<https://genjiito.org/journals/journal5/> 2020年12月5日参照。

- (4) 徐迎春「豊子愷『源氏物語』中国注釈の舞台裏」『語文研究』107号（2009年6月）では、谷崎訳や与謝野訳などの日本語訳と豊子愷の中国語訳との相違について詳細な比較が行われている。

- (5) 豊子愷『源氏物語』下巻、人民文学出版社、2002年、1290頁。

- (6) 前掲、呉衛峰、2011年、176-177頁。

- (7) 豊子愷「我訳『源氏物語』」『豊子愷全集』文学卷3、海豚出版社、2016年、87頁。

- (8) 前掲、呉衛峰、2011年、176-177頁。徐迎春「豊子愷の翻訳方針について—記念館所蔵豊子愷訳『源氏物語』の原稿を通して—」『Comparatio』vol.14、2010年12月、15頁。

尚、徐迎春は谷崎訳との関連から、豊子愷の参考書籍として玉上琢弥『源氏物語の引き歌 解釈と鑑賞』（中央公論社、1955）についても言及している。前掲、徐迎春、2009年、16-17頁。

- (9) 林文月が参照したウェイリーとサイデンステッカーの版本はそれぞれ以下の通りである。

ウェイリー：George Allen & Unwin Ltd., London, 1925。

サイデンステッカー：Alfred A. Knopf, New York, 1976。

- (10) 前掲、林文月、65-70頁、78頁。

- (11) 周作人や銭稻孫らではなく豊子愷が選ばれた経緯や、翻訳に際しての彼らと豊子愷との関わりについては、以下に詳しい。

前掲、呉衛峰、2011年。呉衛峰「銭稻孫と日本古典文学の中国語訳—『源氏物語』「桐

壺」巻の訳を中心に一」『比較文学』第55巻、2013年3月。文潔若「『源氏物語』はいかに訳されたか」（初出『人民中国』2006年6月号）<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/fangtan/200606.htm> 2020年12月5日参照。楊曉文「中国における『源氏物語』全訳の成立に関する一考察—豊子愷、銭稻孫、周作人のかかわりを中心に」『中国研究月報』第66巻第2号、2012年2月。

- (12) 前掲、呉衛峰、2011年、178頁。
- (13) 鮑耀明編『周作人晩年書信』真文化出版公司、1997年、338・368・407頁。
- (14) 姚繼中「『源氏物語』に関する翻訳検証研究の必要性—豊子愷、林文月、姚繼中の翻訳した『源氏物語』和歌を例として—」『東アジア研究』第13号（山口大学大学院東アジア研究科、2015年3月）、288・291頁。（原文日本語）

本研究は JSPS 科研費17K02465の助成を受けたものである。

—おおの きみか・東洋大学法学部教授—